



筑紫女学園大学リポジット

A's B と B of A のカテゴリー分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部 公開日: 2014-03-26 キーワード: 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/274

A's B と B of A のカテゴリー分析

緒 方 隆 文

Categorical Approach to “NP1's NP2” and “NP2 of NP1”

Takafumi OGATA

1. はじめに

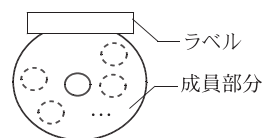
英語の属格表現(NP1's NP2)と of 表現(NP2 of NP1)は、ともに2つの名詞句を関係づける表現である。関係づけは多様であるため、意味においても多様性が生じる。多様さゆえに、ややもすると意味を羅列するだけになりがちである。そこで本稿では、カテゴリーの視点から、統一的にこの2表現の意味と、意味のプロセスを考察する。方法として、緒方(2013)の日本語「NP1のNP2」のカテゴリー分析をそのまま用いる。「NP1のNP2」もまた2つの名詞句を関係づける表現だからである。

緒方(2013)では、「NP1のNP2」をカテゴリーを通して考察し、NP1とNP2のすべての関係づけを明らかにしようと試みた。具体的には関係づけが2つある。1つは同一カテゴリーでの、ラベルと成員の関係がある。もう1つは複数(基本2つ)のカテゴリーが交わり、互いの成員に同一視される成員を持つ関係がある。そしてカテゴリーにおける関係づけ(意味づけ)のプロセスと、意味の分類を行った。その分析をそのまま用いて、「NP1のNP2」と、英語の属格表現と of 表現を比較しながら、2表現の意味を分析する。

ここでの結論は2つある。1つは「NP1のNP2」と同様に、英語の2表現もまた、カテゴリー分析に従うことを示す。2つめは、表現によって適否が異なるのは、各表現に課せられる制限が違うからだとしていく。以下、2節で緒方(2013)の概略、3節で参照点、4節で分析の全体像を示す。そして5節で単一カテゴリー推移、6節で複合カテゴリー推移の具体的な分析を示していく。

2. 緒方(2013): 「NP1のNP2」の意味と意味プロセス

「NP1のNP2」は、NP1を参照点として、NP2へと焦点が推移する表(1) 現になる。NP1とNP2は何らかの関係があるが、緒方(2013)では、その関係はカテゴリーに基づくと考えた。



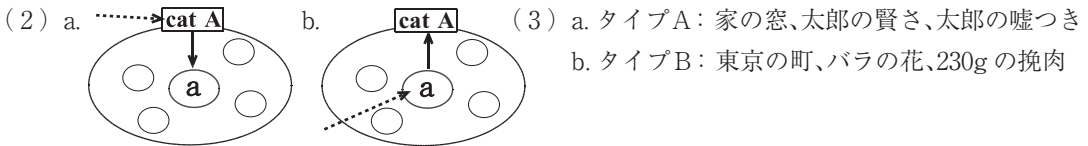
そこでまずカテゴリーの考え方を示したい。本稿でのカテゴリーは、境界を持ち、他と区別される〈集合体〉になる。そのため広く認知されたものから、その場限りの一時的なものまでである。このときカテゴリーは(1)のように基本、カテゴリーラベル(以下ラベル)と成員部分から構成される。カテゴリーはプロトタイプ効果を保持しているため、境界は必ずしも明瞭ではなく、文脈などにより変動する。定まった境界はない。このときカテゴリーの成員部分は、個体成員か属性成員の、大きく2種類ある。「男性が3人いる」の〈男性〉は個体成員の集合体で、「男性と女性は異なる」の〈男性〉は属性成員の集合体になる。カテゴリーを見ると主観的に、個体か属性のどちらか一方の見方になる。

ここで「NP1のNP2」表現の分析に入りたい。この表現で、NP1とNP2は何らかの関係を持つ。もし関係がなければ、NP1が参照点となりNP2と結びつくことはない。この関係には種類が数多

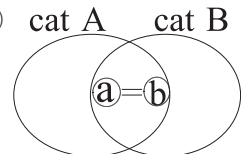
くあるため、意味もそれに依じて多様になる。しかしこうした多様な意味も、カテゴリーの視点から考えると、大きく4種類に分けられることを示したのが、緒方(2013)になる。

緒方(2013)では、まずNP1を参照点として、NP2に焦点が推移するという焦点推移は、カテゴリー上で起こると主張した。カテゴリーは1つだけの場合と、2つ以上ある場合がある。1つのカテゴリーで推移が起こる場合を「単一カテゴリー推移(Single Category Shift)」、複数カテゴリーで推移が起こるものを「複数カテゴリー推移(Plural Category Shift)」と呼んだ*1。

単一カテゴリー推移の場合、カテゴリーは一つであることから、NP1とNP2は、ラベルと成員のどちらかになる((2): 以下、ラベル名の cat は、カテゴリーを指す)*2。〈ラベル〉を参照点とし、〈成員〉に焦点が推移する(2a)タイプを、タイプAと呼ぶ。一方、〈成員〉を参照点として、〈ラベル〉に焦点推移する(2b)タイプをタイプBと呼んでいく。具体例として(3)のような例がある。



一方複数カテゴリー推移では、(4)のように、2つのカテゴリーでの(4) cat A cat B 推移が原則となる。参照点のNP1は cat A 側のいずれか(ラベルか成員 a)になり、焦点先のNP2は cat B 側のいずれか(ラベルか成員 b)になる。



この複合カテゴリー推移では、cat A 側から cat B 側へと推移するため、推移の向きは1種類しかない。そのため向きによる分類はない。その代わりに、変項の有無で分類する。本稿で用いる変項とは、名詞において値が指定されていない成員(x)を指す。変項(x)は、別カテゴリーの成員によって値が充足され、意味が完結する。変項があるタイプをタイプC、変項がないものをタイプDと分類する(6節参照)。具体例として(5)のような例がある。

(5) タイプC: この芝居の主演、机の前、物理学の研究、タイプD: ピアニストの政治家、赤の服
よって単一カテゴリー推移に2タイプ(タイプAとタイプB)、複合カテゴリー推移に2タイプ(タイプCとタイプD)の4種類があると考えられる。ただしこの4種類は、成員部分によってさらに細分される。成員には、個体の場合と、属性の場合と、サブカテゴリーの場合がある(サブカテゴリーは単一カテゴリー推移のみ)*3。これにより細分すると全部で10種類ある。表(6)にこれを示す。

(6)

		NP 1	NP 2	成員		
単一カテゴリー推移	タイプ A	ラベル	→	成員	タイプ A 1	個体成員
					タイプ A 2	属性成員
					タイプ A 3	サブカテゴリー
	タイプ B	成員	→	ラベル	タイプ B 1	個体成員
					タイプ B 2	属性成員
					タイプ B 3	サブカテゴリー
複合カテゴリー推移	タイプ C (変項あり)	cat A の成員	→	cat B のラベル	タイプ C 1	個体成員 (cat B に変項)
	タイプ D (変項なし)	cat A のラベル	→	cat B の成員	タイプ C 2	属性成員 (cat A に変項)
		cat A のラベル	→	cat B のラベル	タイプ D 1	個体成員
					タイプ D 2	属性成員

(6)の一番左列は、カテゴリーの数による大分類で、単一カテゴリー推移と複合カテゴリー推移になる。さらに単一カテゴリーでは、焦点推移の向きによりタイプAとタイプBに、複合カテゴリー推移では、変項の有無によりタイプCとタイプDに分けられる(左から2列目)。左から3列

目は、NP1とNP2が何になるかを示してある(後で一部変更)。右2列は、成員の種類により細分したタイプ名と、その成員の種類を述べている。以上、大きく4分類、細かく10分類に分けられる。この分類は属格表現とof表現にもあてはまる。それを示す前に次節で、参照点について考察する。

3. 参照点と擬似参照点

属格表現(NP1's NP2)は、Langacker(2001)が述べるようにNP1が参照点となって、NP2へと焦点が推移すると考えられる。このとき主要部はNP2であって、NP1はNP2を理解するために補足的な働きをしている。これは日本語「NP1のNP2」でも同じで、参照点NP1が、主要部NP2へと焦点推移する。しかしof表現(NP1 of NP2)では事情が異なる。主要部はNP1であって、of句のNP2が逆に補足的な働きをする。NP1から、NP2へと焦点推移はするが、中心となる語は、依然としてNP1になる。

そのため本稿では、次のように考える。(7) a. NP1's NP2(NP1のNP2) b. NP1 of NP2
 属格表現(NP1's NP2)や「NP1のNP2」の場合、(7a)のように補足的働きをするNP1が参照点となり、主要部のNP2へと焦点推移する。一方of表現の場合、(7b)のように、NP1からNP2に焦点推移するが、NP1は主要部ゆえに際立ちを保ち続ける。そのため焦点が一旦はNP2に移行するが、NP2は独り立ちできず、NP1に焦点が立ち戻る。つまりNP1→NP2→NP1という擬似的な焦点推移があると考えられる。こう考えるとき、of句のNPは擬似参照点と見なせる。つまり「NP1 of NP2」ではなく、「NP2 of NP1」と考えていく。3表現はすべてNP1を参照点として(of表現では擬似参照点として)、NP2に焦点推移するとみなす。次節では各タイプを見る前に、3表現の全体像を先回りして示していく。



4. 全体像: NP1のNP2、of表現(NP2 of NP1)、属格表現(NP1's NP2)

NP1のNP2、of表現、属格表現の3表現は、2つのNPを結びつける表現である。しかし適正となる結びつけの関係は、各表現で異なる。各表現に課せられる制約が異なるからである。本稿では、こうした制約が、生成プロセスと連動する形で、表現の適否を決定すると考える。

本節では、各表現の全体像を示していく。まず2つのNPは、完全に対等な関係のものは存在しない。何らかの優位性が働く。参照点となるNP1には、NP2に比べて少なくとも際立ちがなければならない。そうでなければ参照点になり得ないからである。これに加え、個別の制約が課せられていく。

日本語の「NP1のNP2」の場合、参照点であるNP1には、際立ちが必要である。NP1が、NP2より際立っていないければ不適格になる。しかしそれ以外は、強い制約があまりなく、3表現の中では一番多様な関係を許容する。[二重所属]など限りなく対等な関係さえも認める。ただこうした関係は直接的な関係に限られる。つまり属性の比喩を認めない。「おやじのずるがしこさ」とは言えても、「おやじのたぬき」とたぬきを比喩で使えない。英語表現では、a bear of a manのように属性の比喩を認めるものがある。そのため、属性比喩を認めないのは「の」の特性と考えられる。

次に属格表現(NP1's NP2)でも、参照点NP1には、NP2に比べて際立ちが必要である。しかし「NP1のNP2」と違い、NP1は単なる参照点であるだけでなく、それ以上のものを要求する。NP2に対して、NP1が支配的優位に立たなければならない。支配的優位とは、NP1に対して不可逆的な優位性のことをさす。NP1がNP2をコントロールしたり、強い影響を与えなければならない。典型的には所有がある。所有者と所有物には不可逆的な優位性がある。他には特定の時間や場所が、そこに存在するものに対して、強い影響を持つとき、不可逆的な優位性を持つ。存在物そのものは、時間

や場所に影響を与えられないからである。ただし単なる場所や時間を表すときには、支配的優位性はない。そのため*ten o'clock's meetingのような表現は認められない。

また行為名詞と項の関係にも、不可逆的な優位性がある。行為の主導権を握るのは、項であって、行為そのものではない。そのため力関係として、項に支配的優位性があると考えられる。それは被動者の場合であっても、同じである。一方、支配的優位性を持ちにくいものとして、固有の属性がある。すでにある固有のものに対して、優位性を持ちえないからである。そのため属格表現では、属性成員の場合、基本不適格となる。またタイプBでは、成員からラベルへの推移になる。成員はラベルに対して支配的優位性を持つことはないため、すべて不適格となる。

of 表現(NP2 of NP1)でも、NP1に対して制約が働く。NP1は、NP2の何らかの起点である必要がある。of は元々「～から離れて」が原義で、起源、全体、所属などの意味が派生している。NP1はNP2に対して、出発点でなければならない。それは〈全体と部分〉の全体であったり、何らかの影響を与える起点であったり、何らかの起点性が必要なのである。そのため、*the meeting of [11/Tokyo] (11時の/東京での会議)など、単なる場所・時間では状況背景に過ぎず、of 句にこれない。また起点性がない対等の関係を持つタイプD1を認めない。同様に起点性のない関係である地名属性、役割属性なども許容しない。様々な関係を許容する一方、「の」とはかなり異なる。

ただしこうした判断基準は、話者によってゆれがある。しかしそれは何にまで支配的優位性とか起点性を認めるかの違いにすぎず、判断基準は同じと考える。なお英語の2表現、of 表現と属格表現は2者択一的なものではない。これに複合語(NP1+NP2)が加わる。話者はより自然と思う表現を3つから選択するため、2表現とも△になる場合がある。先回りして、3表現の適否を表(8)に示す。

(8)

		NP1	NP2	成員		NP1のNP2	A of B	A's B
単一 カテゴリ 推移	タイプA	ラベル → 成員	A1	個体成員	全体と部分	○	○	
					時間等の状況背景	○	○	
					×集合体の成員	○	×	
			A2	属性成員	全体と部分	○	○	
					属性強調	○	×	
					間柄	×	×	
	A3	サブカテゴリー	種類	△	△			
	タイプB	成員 → ラベル	B1	個体成員	全体と部分	○	×	
					数属性の強調	○		
地名属性					×			
役割属性			×					
B2	属性成員	数量名詞	○					
B3	サブカテゴリー	所属カテゴリー	△					
複合 カテゴリ 推移	タイプC	cat A (成員) → cat B (ラベル)	C1	個体成員 (cat B に変項)	非飽和名詞	○	○	
					関係概念	○	△	
					飽和名詞の関係概念	○	△	
					数量・性質	○	○	
					行為名詞の項	○	○	
	タイプD	cat A (ラベル) → cat B (成員)	C2	属性成員 (cat A に変項)	属性特定	○	×	
					否定的呼びかけ	×		
					×属性の比喩	○		
タイプD	cat A (ラベル) → cat B (成員)	D1	個体成員	二重所属	×	×		
				D2	属性成員		属性一致	○
							程度一致	○

(8)の分類は(6)と同じで、大きく4分類、小さく10分類ある。(6)に加えて、「NP1のNP2」のタイプ別の意味と、英語の2表現の適否も併記してある。しかし緒方(2013)からの修正が、一部ある。1つは左から3列目の何がNP1とNP2になるかの箇所、タイプC2、タイプDに変更がある。もう一つは右から3列目の細かい意味で、移動と追加がある。5節、6節で具体的にすべてのタイプを考察する。

5. 単一カテゴリー推移 (Single Category Shift)

この推移では、1つのカテゴリー内で、ラベルと成員間で焦点推移する。焦点推移の向きにより、2タイプある。1つは、ラベルが参照点になり、成員に焦点推移する(タイプA: (2a))。もう1つは、成員が参照点になり、ラベルに焦点推移する(タイプB: (2b))。以下、順に見ていく。

5.1 タイプA: [ラベル]から[成員]への焦点推移(2a)

タイプAでは、ラベル(NP1)から成員(NP2)への焦点推移がおこる。成員の種類により3つに細分される。個体成員であればタイプA1、属性成員であればタイプA2、サブカテゴリー成員であればタイプA3になる。このタイプは、ラベルという〈全体〉から、成員という〈部分〉への推移になるので、of表現と相性がよく、「間柄」を除いてすべて適格になる。一方属格表現は、NP1に支配的優位性がない場合は、不適格になるが、[集合体の成員]以外のタイプではすべて適格な表現がある。

5.1.1 タイプA1: 〈全体と部分〉、〈時間等の状況背景〉、〈集合体の成員〉

タイプA1では、ラベル(NP1)から個体成員(NP2)に焦点推移する。緒方(2013)では、このタイプに2種類あげた。1つは[全体と部分]で、NP1が全体、NP2が部分の関係を持つ。例は(9)になる。

(9)家の窓、エリザベス号の客室、20ページの3行目[ページ内の場所]、フランスのパリ[都市]等
対応する of 表現は、全体が起点となり、部分に達するため基本適格になる((10))。一方属格表現では、NP2とNP1の関係によって適格性に幅がでる。NP2が、NP1の根幹となる成員であれば、両者は強い結びつきを持ち、NP1とNP2は支配的關係となり、支配的優位性が生じる。そのため the car's engine は適格になる。しかし部分を表す NP2が、NP1にとって関わりが弱まれば弱まるほど、支配的優位性を持ちにくく、2つのNPの結びつきは弱くなる。そのため容認度が落ちてくる。

(10) the engine of the car, the windows of the house, the first sentence of this page, the top of the list, etc.

(11) the car's engine, ?the house's windows, ?the page's first sentence, *the list's top, etc.

もう1つは[時間等の状況背景]で、NP1に時間等の状況背景がきて、NP2がそこに存在するものになる。緒方(2013)ではNP1に時間がくる(12)のような例をあげた。ただし時間だけでなく、「ステージ上の花子」のように状況や場所を述べるものも含まれると考えられる。

(12) 東京オリンピック当時の君、着物を着た時の洋子、大正末期の東京 (西山 2003: 31)

of 表現では、全体と部分の關係に似ており、起点性があるので適格になる((13))。一方属格表現では(14)のように不適格になることが多い。NP1に支配的優位性があるとは言えないからである。

(13) Rome of the Imperial period, a playwright of the Victorian era, the people of Noah's time, etc.

(14) *Imperial period's Rome, *Victorian era's playwright, *Noah's time's people, etc.

しかし(15)(16)のような例では、of表現も属格表現も適格になる。そこでは単なる場所や時間というより、NP1とNP2がより強い關係になっており、NP2はあたかもNP1の所有物のような感

があるからである。そのため NP1は、NP2に対して支配的優位性を持つ。(14)と異なり(16)は適格になる。

(15) the history of America, the future of Africa, the adolescents of today, etc.

(16) America's history, Africa's future, today's adolescents, last week's party, etc.

さらにここに[集合体の成員]を加える。NP1がカテゴリー(集合体)を、NP2が任意の成員を示す。これは二重属格の用法になる。二重属格とは of 句に属格表現が現れる(17)のようなもので、属格の名詞句は、定で人間でなければならない(Quirk et al. 1972)。a work of Milton's と言えば、Milton's が Milton's works というカテゴリーを示し、そこから任意の成員(a work)が選ばれる。

(17) a work of Milton's, a friend of his father's/my parents' (Quirk et al. 1972: 203)

of 表現の起点性に、属格表現の支配的優位性が加わる。Milton の強い影響(本人が書いた)作品の1つという意味になる。of 表現はカテゴリーと成員の関係だけ単に述べるため、NP2に定表現がくる *the work of Milton's 等の表現は不適格になる(cf. Quirk et al. 1972: 890)。一方「父の友人」や Milton's work は、タイプ C1 の[飽和名詞の関係概念]であり、用法としては of 表現のみがある。

5.1.2 タイプ A2: 〈全体と部分〉、〈属性強調〉、〈間柄〉

タイプ A2 では、ラベル(NP1)から属性成員(NP2)へ焦点推移する。緒方(2013)では「NP1の NP2」に4種類あげたが、その中の「NP2に、NP1の数量・性質等を表す語がくるもの」は C1 タイプに属すると修正する。そのためここでは3種類を示す。1つめは[全体と部分]で、ラベルという全体(NP1)とその属性(NP2)の関係になる。「NP1の NP2」の例を(18)に示す。

(18) 太郎の賢さ、血の赤色(が目立っている)、猫のジャンプ力、ナイフの切れ味、…

対応する of 表現は、全体と部分ゆえに適格になる(例は(19))。一方属格表現では通例、NP2が属性の場合、コントロールできないので支配的優位性がなく、不適格になる。しかしここでは例外的に、NP1の意思でその属性を持つ意味合いがあり、ある意味コントロールしている。そのため支配的優位性があり適格となる(例は(20))。

(19) the cruelty of the Nazis, the redness of blood, the strength of a fabric, etc.

(20) the firefighter's courage, a woman's beauty, a man's strength, etc.

2つめは[属性強調]で、NP2が、NP1の典型的属性になり、その属性を強調する(例は(21))。of 表現では、全体と部分の関係の一種であり、適格となる(例は(22))。しかし属格表現では、本来の属性であり、コントロールの外にあり、支配的優位性はない。よって不適格となる(例は(23))。

(21) あたりそこねのポテポテ、揚げたてのアツアツ、江戸前のこってり、… (鈴木 2002: 43)

(22) the coldness of the ice, the heat of just fried bacon, the hotness of a pepper, etc.

(23) *the ice's coldness, *the fried bacon's heat, *a pepper's hotness, etc.

3つめは[間柄]で、(24)のように NP2に間柄を表すものが現れる。「太郎のおにいちゃん」では、太郎=おにいちゃんになっており、太郎の中のおにいちゃんという属性を強調している。

(24) 太郎のおにいちゃん、佐藤のだんな、鈴木 of の兄貴、…

これに対応する of 表現と属格表現は、どちらもない(例は(25)(26))。というのも NP1と NP2は表現の言い換えに過ぎず、対等な関係に近い。そのためそれ以上の制約を課す英語2表現はどちらも不適格となる。後述のタイプ B2 の[役割属性]も同様の理由で不適格になる。

(25) *a brother of Taro (Taro=brother) (26) *Taro's brother (Taro=brother)

5.1.3 タイプ A3: 〈種類〉、〈行動名詞と付加詞〉

タイプ A3 では、成員がサブカテゴリーになっており、種と類の関係になる。緒方(2013)では、

「NP1の NP2」に2種類あげた。1つは[種類]で、NP2が NP1のサブカテゴリー(種類)になる(例は(27))。

- (27) a. シェークのバニラ、b. 牛井の大盛り、c. にぎりの特上、d. ジョニーウォーカーの黒、
e. バランタインの17年もの、f. カローラの1500cc, etc. (三宅 2011: 86)

これに相当する of 表現と属格表現は、(28)(29)のようにあるにはあるが、複合名詞(NP1+NP2)の方が自然であることが多い。というのも種類を限定する場合、複合名詞が自然だからである。しかし Ballantine's 30 Year Old のように、製造元を属格表現におくことで、その属性が NP1に強く影響を受けていることを示すものもある。

- (28) ice cream of Vanilla, 1.25 L bottles of Coca-cola, a large helping of spaghetti, etc.

- (29) Ballantine's 30 Year Old, Johnnie Walker's Black Label, etc.

2つめは[行為名詞と付加詞]で、行為名詞がラベル(NP1)になって、その成員として付加詞が NP2に現れる(例は(30))。行為名詞に関連するものという緩やかな結びつきのカテゴリーに、付加詞が成員として含まれる。これに対応する of 表現は全体と部分の一種になるため、適格になる。一方属格表現の場合、NP1が、NP2に対してコントロールせず、支配的優位性がないため、不適格になる。

- (30) 結婚の目的、通学の手段、開始の時刻、出発の空港、料理の材料、… (島津他 1986: 264)

- (31) the purpose of the wedding, the time and cost of commuting, the time of onset, the airport of departure, the ingredients of New Year's dishes, etc.

- (32) *the wedding's purpose, *the commuting's cost, *onset's time, *departure's airport, etc.

5.2 タイプ B: [成員] から [ラベル] への焦点推移(2b)

タイプ B では、1つのカテゴリーで、成員からラベルに焦点推移する。タイプ A と同様、成員の種類により3つに分けられる。個体成員がタイプ B1、属性成員がタイプ B2、サブカテゴリーがタイプ B3になる。of 表現の場合、タイプ A よりも不適格になる場合が増える。成員(NP1)が起点になりにくいからである。一方属格表現では、成員(NP1)に支配的優位性がないため、すべて不適格となる。

5.2.1 タイプ B1: 〈全体と部分〉

タイプ B1 では、NP2は、NP1が属するカテゴリーを示す。ここでは NP1が個体成員になっている*4。「東京の町」で言えば、〈東京〉が、カテゴリー〈町〉に属していることを示す。どのカテゴリーに属するとするかは、主観に左右される。

- (33) 東京の町、日本の国、日の丸の旗、富士の山、クリスマスの日、… (三宅 2011: 81-85)

相当する of 表現は、同格と呼ばれる(34)のような例がある。属するカテゴリーが NP2 にきて適格となる。しかし属格表現では、NP1 が支配的優位性を持ちえず、(35)のように不適格となる*5。

- (34) the city of London, the art of painting, the island of Hawaii, the Republic of Chile, the day of Christmas, the great country of America, etc.

- (35) *London's city, *Hawaii's island, *Christmas' day, *Chile's Republic, etc.

5.2.2 タイプ B3: 〈所属カテゴリー〉

(36)のような例がタイプ B3になる。一見、タイプ B1と同じに見えるが、NP1がサブカテゴリーになる。つまり NP1が特定のもの指さない。ここでも NP1が属するカテゴリーを、NP2が表している。

- (36) チューリップの花、バラの花、スマイルの花、松の木、銀杏の木、etc. (三宅 2011: 82)

英語の場合、種類を表すので複合名詞(NP1+NP2)が、2表現より自然な表現になる。しかし of 表現で(37)のような例はいくつか見られる。適格と判断する話者も少数はいるが、容認性は低い。一方属格表現は、NP1に支配的優位性が全くないので、不適格になる。

(37) ?flowers of roses, ?trees of roses, ?trees of pine and cedar, etc.

(38) *rose's trees, *rose's flower, *tulip's flower, etc.

5.2.3 タイプB2: 〈数属性の強調〉、〈地名属性〉、〈役割属性〉、〈数量名詞〉

タイプB2ではNP1が、NP2の属性を表している。緒方(2013)では4種類の「NP1のNP2」をあげた。1つめは[数属性の強調]で、NP2の属性であるNP1を強調する。(39)では、NP1の一個70円、230g、長さ3.6m はすべてNP2の属性であり、それらNP1を強調する表現になっている。対応する of 表現は適格になる((40))。ここでは of 句のNP1は、NP2を他と区別する決定的特徴であり、いわば擬似的にカテゴリー化している。そのため、そのカテゴリー(NP1)内の成員(NP2)として、全体と部分の似た関係で適格となる。一方属格表現は、NP1がNP2に対して支配的優位性を持たないため不適格となる。

(39) 一個70円のコロッケ、230gの挽肉、長さ3.6mのブロック塀、…

(40) a sword of one meter, a prize of fifty dollars, the minced meat of 100 grams, etc.

(41) *ten meter's wall, *fifty dollars' prize, *100 grams' minced meat, etc.

2つめは[地名属性]で、住んでいる場所などがNP1に来て、NP2に人がくる(例は(42))。これは人を弁別するときに、住所が有効な属性であるため、参照点として機能している。これに対応する of 表現も属格表現もない。of 表現の場合、住所(NP1)はあくまで場所を表しているにすぎず、NP1は起点性を持たない。一方属格表現の場合、NP1が何ら支配的優位性を持たず、不適格となる。

(42) 神戸のおじさん、巣鴨のおば、東京の坂田、…

(43) *the uncle of New York, *Skata of Tokyo (44) *New York's uncle, *Tokyo's Sakata

3つめは[役割属性]で、役割などの属性がNP1に来る(例は(45))。ここでもNP1の属性を強調している。対応する of 表現は不適格になる((46))。NP1とNP2は言い換え表現に近く、対等に近い。そのため起点性がない。一方属格表現でも、NP1に支配的優位性がなく、不適格になる(例は(47))。

(45) 首都の東京、課長の島さん、… (三宅 2011: 83)

(46) *Tokyo of the capital, *Mr. Shima of manager, etc.

(47) *the capital's Tokyo, *the manager's Shima, etc.

4つめは[数量名詞]で、NP1に、NP2の数量を表す数量詞がくる。これは2段構えで考える。(48)の「3台の車」で言えば、車というカテゴリーの中から、3台取り出した部分カテゴリーを想定する。その部分カテゴリーの属性が、〈3台〉と考える。これが属性であるため、タイプB2になる。

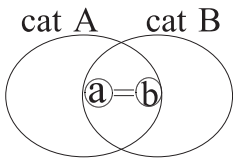
(48) 3台の車、8人の学生、5本のびん、1リットルの酒、3匹の子豚 (西山 2003: 27)

英語の場合、「3台の車」などは three cars など数詞+名詞で通例表現される。しかし of 表現にこの用法がある。集合体を表す名詞が前にきて、of 句に数字が現れる((49))。数情報がNP2に強く影響を与える起点となるからである。一方属格表現では、NP1に支配的優位性がなく不適格となる。

(49) a family of five, a group of three, an intimate meeting of six, etc.

(50) *five's family, *three's group, *six's meeting, etc.

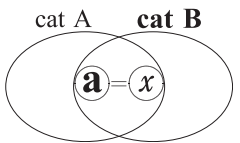
6. 複数カテゴリー推移 (Plural Category Shift)

複数カテゴリー推移では、基本2つのカテゴリーで焦点推移がおこ (51)  (51) cat A cat B
 る。基本構造は(51)になる。方向は cat A 側から cat B 側への焦点推移で、1つしかない。その代わりに、成員に変項(x)があるかないかで分類される。変項(x)があればタイプC、なければタイプDとなる。変項があるタイプCでは、個体成員のとき、cat B 側に変項がある。これをタイプC1とする。一方属性成員のとき、cat A 側に変項(x)がある。これをタイプC2と呼ぶ。タイプDも同様に、個体成員の場合タイプD1、属性成員の場合タイプD2とする。

6.1 タイプC: 変項を含む(複合カテゴリー推移)

タイプCは変項を含むものになる。of 表現の場合、一部を除き基本すべて適格となる。というのもNP1が全体またはそれに類する意味を持つことが多いからである。一方属格表現でも、タイプC2(属性成員)以外、判断にはゆれがあるが、すべて適格となる。ともに代表的用法の1つになる。

6.1.1 タイプC1: (非飽和名詞)、(関係概念)、(飽和名詞の関係概念) (数量・性質)、(行為名詞の項)

タイプC1は個体成員の同一化で、cat B 側に変項(x)がある。図示し (52)  (52) cat A cat B
 たものが(52)になる。NP1は cat A の成員 a、NP2は cat B のラベルになる。そしてNP1は、cat B の成員(変項(x))と同一化される。言い換えれば、変項(x)の値が、cat A の成員 a になる。cat A は、値の候補となる成員の集合体になる。変項(x)の種類は、NP2ごとに固定しているため複数の解釈がうまれることは基本ない。

緒方(2013)では「NP1のNP2」の例として4種あげていたが、「数量・性質」(元はA2タイプ)をここに移動して、5種類述べる。1つめは[非飽和名詞]で、(53)のように、NP2に非飽和名詞がくる。NP2には「何のNP2/誰のNP2」という変項(x)があり、その値がNP1になる。

(53) a. この芝居の主演、b. 第14回ショパン・コンクールの優勝者、c. 太郎の上司、d. この大学の創立者、e. 『源氏物語』の作者、f. 生成文法理論の研究者 (西山 2003: 33)

対応する of 表現は適格になる。NP1には全体と部分に似て、NP2を包み込む所属のような関係であり、起点性がある。また属格表現でも、NP1が支配的優位性をもつので、適格となる。

(54) the founder of Microsoft, the author of *The Little Prince*, A boss of mine, the researchers of applied linguistics, the winner of this competition, etc.

(55) Microsoft's founder, the book's author, Tom's boss, the competition's winner, etc.

2つめは[関係概念]で、NP2に、NP1との関係概念がきて、NP1がその基準を表す。(56)は単なる関係で、a は場所、b は時間、c はその他の関係語(NP2)の例になる。(57)は親族関係を表す。

(56) a. 前、後ろ、左、右、上、下、中、外、内側、外側、そば、向こう、…

b. 前、後、翌日、前日、翌年、前年、翌々年、… c. 外延、内包、圏外、圏内、…

(57) さとこの父、さとこの母、さとこの姉/妹/兄/弟/おじさん/おばさん/祖父/祖母、等

of 表現は、(56a)では全体・部分の関係で起点性があり、(56b, c)では基準となることから起点性がある。そのため適格になる。しかし属格表現は、(56a)では全体・部分の関係で支配的優位性があり適格になるが、(56b, c)では、もはや支配的優位性がNP1になく、不適格となる。

(58) a. the top of the mountain, the left of the line, b. the next day of the meeting, the previous day

of the test, c. the denotation of a lexeme, out of service, etc.

- (59) a. the mountain's top, the screen's bottom left, b. *the meeting's next day, *the test's previous day, c. *the lexeme's denotation, *service's out, etc.

3つめは[飽和名詞の関係概念]で、(60)のように、本来は飽和名詞である NP2が、一時的に関係概念になっている。一時的な関係概念ゆえに、多様な解釈を許す。

- (60) 私の本、3階の居酒屋、東北の芸人、サッカーのベッカム、…

of 表現では NP1に全体・部分または影響を持つという起点性があり適格になる。一方属格表現は、関係自体が多様なため、支配的優位性があるものとならないものがある。あるときのみ適格な表現となる。

- (61) the books of my father, the lobby of the third floor, the women of Osaka*⁶, etc.

- (62) my father's books, *third floor's restaurant, *Osaka's women, etc.

4つめは[数量・性質]で、NP2に、NP1の数量・性質等を表す語がくる。(63)は NP2にくる語で、性質・属性を表す語を(63a)、集合体 NP1の数量等を表す語を(63b)にあげている。of 表現では全体・部分に似た関係で適格になる。属格表現でも、NP1に支配的優位性があるため適格になる。

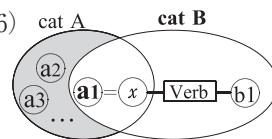
- (63) a. 「重さ」、「長さ」、「大きさ」、「面積」、「体積」、「場所」、「形」、「色」、「かおり」、等

- b. 「個数」、「種類」、「選択」、「平均」、「平均値」等 (島津他 1986: 249)

- (64) the weight of vehicle, the length of a finger, the area of a square, etc.

- (65) the vehicle's weight, the train's speed, the square's area, etc.

5つめは[行為名詞の項]で、NP2に行為名詞(句)、NP1に項(内項 (66) cat A cat B
または外項)がくる⁷。構造としては(66)に示すように、動詞の項が
変項(x)になる。(67)では NP1が内項(目的語)、(68)では NP1が外項
(主語)にあたるものが来ている。



- (67) 物理学の研究、この町の破壊、パスポートの紛失、軍隊の放棄、夜間外出の禁止

- (68) 田中教授の指摘、ミニスカートの流行、洋子の到着、貴乃花の引退 (西山 2003: 40-41)

対応するof 表現、属格表現どちらも適格となる。(69)が内項、(70)が外項に相当するものが NP1 に来ている。4節で述べたように、行為において主導権を握るのは項であって、行為そのものではない。of 表現の場合、行為が起点となって行為そのものが成り立つ関係にあるため、適格となる。また属格表現では、主導権を持つ NP1は、そのまま支配的優位性も持つ。そのため適格となる。

- (69) a. the destruction of the city, the release of all political prisoners, the rescue of the driver, the reduction of the budget, etc.

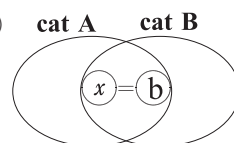
- b. the city's destruction, the prisoners' release, the driver's rescue, etc.

- (70) a. the consent of the parents, the retirement of the Yokozuna, etc.

- b. the parents' consent, the Yokozuna's retirement, etc.

6.1.2 タイプ C 2: 〈属性特性〉、〈否定的呼びかけ〉、〈属性の比喩〉

タイプ C 2 は属性成員の同一化で、cat A に変項(x)がある。ただし (71) 緒方(2013)を一部修正したい。緒方(2013)では、NP1が cat A のラベル、NP2が cat B の成員 b とした。しかし英語の表現を検討する中、NP2は cat B のラベルと考える方がより自然とわかった。そのため(71)の構造とする。cat A の属性(x)が、cat B の属性 b と同一で、2つのラベルが NP1 と NP2 になる。緒方



(2013)では「NP1のNP2」に、2種類の例をあげた。1つは「属性特性」で、NP1の属性(x)が、NP2の属性と単純に一致する(例は(72))。「カーブのすっぱぬけ」で言えば、カーブの属性が何かというと、すっぱぬけの属性と一致する。

(72) カーブのすっぱぬけ(が打者の頭部を襲った)、フォークの落ちそこない(を軽々とスタンドへ運ばれてしまった)、さんまのみりん干し、牛肉のアスパラガス巻き (鈴木 2002: 39)

対応する of 表現はあるが、複合名詞(NP2+NP1)がより自然な表現のことが多い。それは種類を表すと見なされるとき、hamachi sashimi のように複合名詞(NP1+NP2)の表現が簡潔で自然だからである。一方属格表現は、NP1に支配的優位性がないため不適格になる。なおこの意味に限らず属格表現はタイプC2ですべて不適格となる。属性そのものに、支配的優位性がないからである。

(73) sashimi of hamachi, a marinade of vinegar and salt, the cake of pounded fish, etc.

(74) *hamachi's sashimi, *vinegar's marinade, *the pounded fish's cake, etc.

2つめは「否定的呼びかけ」で、否定的内容を直接訴えるような場面などで使われる(例は(75))。基本(72)と同じであるが、呼びかけに用いる点が異なる。例えば(75a)「おねえちゃんのバカ」では「おねえちゃんは何かといえば、バカである」と、直接訴えかけている。これに相当する of 表現、属格表現は、(76)(77)に示すようにない。of 表現では、NP1に起点性がない。話者の主観によって、ある属性を fool や liar と命名しているに過ぎないからである。一方属格表現では、fool や liar に対して、同様の理由で、NP1に支配的優位性がない。そのためどちらも不適格となる。

(75) a. おねえちゃんのバカ, b. 太郎の嘘つき (寺村 1991: 249)

(76) *a fool of mom, *a liar of Bob (77) *mom's fool, *Bob's liar

3つめは「属性の比喩」で、「NP1のNP2」にない用法になる。of 表現で見られる。NP1の属性が何か(x)といえ、NP2の属性と同一であると述べる。いわば比喩表現の一種になる。(78)の a bear of a man で言えば、a man(NP1)が持っている、大きくて剛毛という属性は何か(x)というと、熊の属性と同じである、と述べている。「の」にはこうした比喩の関係を(79)の例のように認めない。属格表現でも、NP1が支配的優位性を持たず不適格になる(例は(80))*。

(78) a bear of a man, an angel of a girl, a slip of a girl/lad, a beast/bull of a man

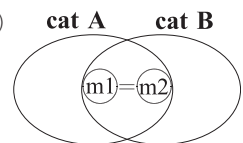
(79) *女の子の天使, *男性のけだもの, etc. (80) *a girl's angel, *a man's beast, etc.

6.2 タイプD: 変項を含まない〈複合カテゴリー推移〉

変項を含まないタイプDでは、NP1が、NP2を記述する。個体成員のときタイプD1、属性成員のときタイプD2になる。タイプDでは、属格表現はすべて不適格になる。叙述する語(NP1)は、される語(NP2)に対して支配的優位性を持ち得ないからである。一方 of 表現はタイプD2のみ適格となる。

6.2.1 タイプD1: 〈二重所属〉

個体成員が同一化されるタイプD1では、構造は(81)になる。cat A (81) と cat B の両方に所属する成員があり、cat A のラベル(NP1)から cat B のラベル(NP2)に焦点推移する。これを「二重所属」とすれば、「NP1のNP2」の例に(82)がある。(82a)ではコレラ患者に属する m1 と、大学生に属する m2 が同一成員になる。



(82) a. コレラ患者の大学生, b. ピアニストの政治家 (西山 2003: 19)

これに対応するものは、of 表現にも属格表現にもない。というのも NP1 と NP2 は対等に近い関係にあり、互いを入れ替えられる。つまりどちらが NP1 になるかは、ただ単にどちらがより際立

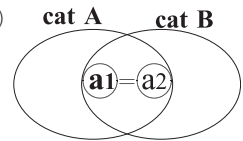
ちを持つかという、主観的な見方の違いにすぎない。しかし of 表現においては、NP1に起点性を求める。単なる場所や時間だけでは不適格になったのも同じである。そのため(83)のように不適格となる。属格表現においても、NP1にむろん支配的優位性などない。そのため(84)のように不適格になる。

(83) *the college student of a cholera patient, *the politician of a pianist, etc.

(84) *the cholera patient's college student, *the pianist's politician, etc.

6.2.2 タイプD2: 〈属性一致〉、〈程度一致〉

属性成員が同一化されるタイプD2では、構造は(85)になる。ここで(85) 緒方(2013)を若干修正したい。緒方(2013)ではNP1は cat A のラベルとした。そしてNP1を参照点として、cat B のラベル(NP2)へと焦点推移すると考えた。しかし用例を検証するなかで、NP1は cat A のラベルだけでなく、cat A の成員もあるとした方がより自然な説明になることが分かった。そのため、NP1は、cat A のラベルと成員の両方の場合があるとする。ただしNP1がNP2を叙述することには変わらない。



緒方(2013)では「NP1のNP2」に、2種類あげた。1つは[属性一致]で、単に属性が一致する。(86)の「赤の服」で言えば、色のカテゴリー(cat A)から、属性成員(赤)(a1)が選ばれ、服が持つ色の属性(a2)と同一化される。一方「政治の話」では、NP1(政治)は cat A のラベルになる。

(86) 赤の服、政治の話、四角の顔、皮のハンドバック、大盛りの牛丼、…

これに対応する of 表現は、全体と部分に似た関係ゆえに、NP1に起点性があり適格になる。しかし属格表現では、NP1に何ら支配的優位性がないので不適格になる。

(87) the subject of politics, an island of peace and love, a suit of greenish-black, etc.

(88) *the politics's subject, *the peace's island, *black's suit, etc.

2つめは[程度一致]で、程度の属性が一致する。(89)の「感動の作品」では、感動と感じるレベルの属性(a1)と、作品が持つレベルの属性(a2)が同一化される。NP1(感動)は cat A のラベルになる。

(89) 感動の作品、本物の技、異例の人事、驚異のジャンプ力、迫真の演技、…

of 表現は、(90)のように適格な表現がある。属性であるNP1の中に、NP2が存在するかのような意味合いになり、全体と部分に似た関係になり、NP1が起点性を持っている。一方属格表現は、NP1に何ら支配的優位性がないため(91)のように不適格になる。なお a man of ability の用法もここに入る。典型的な ability(有能)という程度レベルと、a man の属性が同一化されるからである。

(90) a place of wonderment, the world of contentment, a sense of wonder, etc.

(91) *wonderment's place, *contentment's world, *wonder's sense, etc.

7. まとめ

ここでは「NP1のNP2」の意味をもとに、of 表現と属格表現の意味の生成のプロセスと、意味の分類を見た。ここでの結論は、生成プロセスは、カテゴリー分析に従うということであった。また適否には、その表現が持つ固有の要件が大きく左右することを見た。of 表現の場合、NP1に起点性を要求し、属格表現の場合、NP1に支配的優位性を要求した。今後の課題としては、複合名詞(NP1+NP2)の表現も加え、英語の3表現の使用に当たっての棲み分けを明らかにしていきたい。

【注】

- * 1 この両者の違いは、緊密度の違いにある。二つの NP が、より緊密な関係にあるとき、単一カテゴリ→推移になる。一方、緊密度が弱まれば、複数カテゴリ→推移となる。
- * 2 同一カテゴリ→内で、成員から成員への焦点推移も可能性としてある。しかしラベル自体が表れないため、何のカテゴリ→に属するか分からず、意味の特定に負荷が大きく、認められない。
- * 3 複合カテゴリ→では、成員がサブカテゴリ→になることはない。というのもサブカテゴリ→同士は同一化されないからである。あくまで同一化されるのは、属性成員が個体成員となる。
- * 4 タイプ B1 と B3 で、NP2 にラベルが現れる理由は 3 つある。1 つめは、NP1 が何のカテゴリ→を指すか曖昧なとき、カテゴリ→を NP2 で明示する。2 つめは、NP1 がカテゴリ→の典型例である場合に起こる。3 つめは、NP1 が NP2 の属性をもつことを強調する。
- * 5 複合名詞では、適格な例もあるが、ほとんどが(i)に示すように不適格となる。
(i) *London City, *December month, *Columbia District, etc. (Quirk, et al. 1972: 640)
- * 6 of Osaka は、単なる場所ではなく、大阪の属性をもった集合体というラベル(全体)を表す。
- * 7 2 つ以上の項をとる他動詞では、複数解釈の可能性が出るが、自動詞だったり、選択制限によりどの項になるか決まることも多々ある。
- * 8 life's journey (人生の旅)のように決まり文句で適格になる例も若干存在する。

【参考文献】

- Langacker, R.W. 2001. "Topic, subject, and possessor," in Simonsen and Endressen eds. *A cognitive approach to the verb*. 11–48. Walter de Gruyter.
- 三宅知宏. 2011. 「「主要部」の概念と“X の Y”型名詞句」『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 緒方隆文. 2013. 「[NP 1 の NP 2]のカテゴリ→分析」『年報』第24号. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部 人間文化研究所.
- Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- 島津明・内藤昭三・野村浩郷. 1986. 「助詞「の」が結ぶ名詞の意味関係の解析」『計量国語学』15(7), 247–266.
- 鈴木浩. 2002. 「日本語属格の周縁－意味上の主要部を後項に認めがたい型」『文芸研究』(88), 134–121.
- 寺村秀夫. 1991. 『日本語のシンタクスと意味第3巻』くろしお出版.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)